タルソスのテオドロス
―7世紀におけるイングランドとビザンツ世界の邂逅―

伊藤奏仁

序論

本論文の目的は7世紀にビザンツ帝国の都市タルソス（現トルコのタルスス）で生まれたカンタベリー大司教テオドロスがどのような経歴を辿り、遠く離れたイングランドへ渡ったのかを検討し、そして彼の存在を通してイングランドがビザンツ世界とどのような繋がりを有したのか明らかにすることである。

ベーダが記した『イングランド人の教会史』によると、テオドロスは聖俗両方の文献に、またギリシア語とラテン語に精通した「キリキアのタルソス生まれ」の修道士であり[1]、６６８年にローマでカンタベリー大司教に叙されて北アフリカ出身のハドリアヌスと共にイングランドへ渡り、６９０年に88歳でこの世を去った[2]。キリキアは小アジアの南、シリアの近くに位置する地方であり、タルソスはその中心都市だった。そしてテオドロスが没した年と年齢から判断すると、彼は６０２年にそこで生まれたことになる。

彼が生きた7世紀という時代には、東方においてビザンツ帝国とササン朝ペルシアの戦争（６００年代初頭から６２８年まで）、６３０年代以降のアラブ（黎明期のイスラーム）によるビザンツ領の征服、そして西方のローマ教会をも巻き込んだ単意論論争といった大きな事件が相次いだ。そういった歴史的文脈の中にテオドロスの経歴を位置付けることで、これらの出来事と一見無縁に思えるイングランドとビザンツ世界の繋がりの一端が浮上してくるのである。

しかしながら、ローマでカンタベリー大司教に指名され

る以前のテオドロスの経歴はベーダなどの叙述史料からはほとんど明らかでない。そのような史料状況の中でもテオドロスの経歴に着目する研究者はいた。例えば１９２３年にアルバート・クックがアテナイとテオドロスの関係について論じている。[3]

１９９０年代に入ると、テオドロスの経歴を検討する上で新たな史料の利用が進んだ。１９９４年にマイケル・ラピッジはベルンハルト・ビショッフと共にテオドロス時代のカンタベリーの学校に由来する聖書の解説、すなわち「カンタベリーの聖書注解」を羅英対訳形式で刊行した。[4] そして１９９５年にはラピッジの編集下でテオドロスについての論考集が出版された。[5] これらの出版によって以前よりもテオドロスの経歴に関する研究が行いやすくなった。

ラピッジはこの聖書注解における記述と当時の歴史的文化的背景などを交えつつ、テオドロスの経歴を明らかにしようと試みている。[6] しかしラピッジの研究は、聖書注解から得られる情報が断片的であるがゆえに、推測に頼る部分が多く、その点で限界を抱えている。またラピッジは当時の文芸活動の隆盛と聖書注解の記述から、テオドロスがコンスタンティノープルで勉学に励んだとしている。[7]

一方グリエルモ・カヴァッロは7世紀のコンスタンティノープル以外の地域、すなわちシリア、パレスティナ、エジプト、シチリアなどにおけるギリシア語文化の継続や隆盛を強調している。[8] したがってこの点について、テオドロスの学問的研鑽に関連した検討が必要である。

学問的研鑽と並んで重要なのが、テオドロスと単意論の関係である。ラピッジはいくつかの証拠や傍証を組み合わせることによって、テオドロスがローマで単意論を糾弾した６４９年のラテラノ公会議に関与していたと主張している。[9] 他方でヘンリー・チャドウィックもテオドロスと単意論論争の関係について論じているが、彼がローマでこの論争に関与した可能性には触れていない。[10]

より重要なのはテオドロスがローマでこの論争に関与したかではなく、彼の存在によってこの論争の影響がイングランドにまで及んだということである。

以上のことを踏まえ、以下に「カンタベリーの聖書注解」から推測され得るテオドロスの経歴、およびテオドロスと単意論論争の関係を通して、イングランドとビザンツ世界の繋がりについて論じる。

第1章　先行研究

序論で述べたように、叙述史料からはカンタベリー大司教に指名される以前のテオドロスの具体的な経歴はほとんど明らかでない。ただし例外的に大司教になる以前の彼の経歴に言及する史料が一つだけ存在する。それはテオドロスの没後半世紀以上経った748年に書かれた教皇ザカリアスによる書簡である。その書簡の中でテオドロスはアテナイで教育を受けたとされている。[11]

「カンタベリーの聖書注解」が利用可能になる以前は、テオドロスについてアテナイで教育を受けたと通説的に書かれることが多かった。[12] クックの研究もこの書簡の記述が前提となっている。[13] しかし、ラピッジはザカリアスの証言はテオドロスがギリシア哲学の訓練を受けていたという情報に基づく仮定以上のものであるかは不明瞭であり「カンタベリーの聖書注解」にはアテナイとの繋がりは見られないとしている。[14] ごく最近の通説的説明でもテオドロスとアテナイの関係には言及されていない。[15] 以上のようにかつては大司教になる以前のテオドロスの経歴は不確かな史料に基づいてアテナイで教育を受けたと説明されるのが限界であった。

しかし「カンタベリーの聖書注解」の登場によって彼の経歴についてさらなる研究が可能になった。この聖書注解は1936年にビショッフによって発見された。「カンタベリーの聖書注解」の大半はミラノのアンブロジアーナ図書館に所蔵された11世紀の写本の中にある程度まとまった形で保存されている。またこの聖書注解の部分的な抜粋が11世紀以前に作成された写本にも保存されている。[16] しかしながら、第二次世界大戦の影響もあって、その発見が公にされたのは1953年に発表されたビショッフの論文においてであり、この聖書注解が1994年に刊行されるまでに長い年月を要した。[17]

「カンタベリーの聖書注解」には名指しされていないがセヴィージャのイシドールス（636年没）による『語源誌』からの引用がある。『語源誌』は650年頃から流布されるようになった。一方で、「カンタベリーの聖書注解」を今に伝える写本の中には8世紀半ばに作成されたものが存在する。これらのことから、ラピッジはこの聖書注解が7世紀半ばから8世紀半ばに作成されたとしている。[18]

そしてこの聖書注解にはイングランドで作成された痕跡

が認められる。例えばアングロ・サクソンの貨幣単位であるチェサリング（cesaring）やペンディング（pending）がこの聖書注解で使われている。[19] また『マルコの福音書』に現れるロークスタ＝バッタについて「人々がロプストランと呼ぶ海のロークスタと洗礼者ヨハネが食べていた陸のロークスタが存在する」という記述がある。[20]「海のロークスタ」はウミザリガニのことであり、ロプストランはそれを指す古英語の単語である。[21]

このことに加えて「テオドルス」や「ハドリアヌス」の名が独自の解説の出典として示されており、とりわけ「最近のテオドルスが教えた」という見出しの付いた写本が残っている。[22] 作成された年代、古英語の使用、「テオドルス」や「ハドリアヌス」の名が挙げられていることから「カンタベリーの聖書注解」がテオドロスや彼の同伴者であるハドリアヌスがカンタベリーの学校で行った聖書講義の産物であるのは疑いない。[23]

ラピッジはこの聖書注解を用いることで今までほとんど分からなかったテオドロスの経歴について検討している。彼はこの聖書注解に見られる記述と東方における文化的歴史的背景を総合することで、テオドロスが聖書解釈についてはアンティオキアやエデッサで、そして哲学や医学についてはコンスタンティノープルで学んだと考えている。[24]

ただし、コンスタンティノープルでの勉学についてはカヴァッロから異論が出ている。彼によると、ビザンツ皇帝ヘラクレイオスの治世期（６１０―４１年）におけるコンスタンティノープルは確かに文化的な繁栄を享受していたが、それはつかの間の一時的なものに過ぎず、むしろシリア、パレスティナ、エジプト、そしてシチリアの方がギリシア語文化の継続や隆盛を示していた。ゆえにコンスタンティノープルでの滞在だけがテオドロスの教養を生み出した訳ではなかった。[25]

コンスタンティノープルでの勉学に関する二人の見解の相違はテオドロスがアラブの侵略から逃れる「難民」だったか否かという問題にも関わってくる。ラピッジは、テオドロスがアラブのシリア侵攻と同時期にコンスタンティノープルへ渡ったと考えており、彼がこの侵略から逃れる「難民」だったと考えるのは理に適った推定としている。[26] しかしこの見解に基づくと、テオドロスがコンスタンティノープルからローマへ移動した理由を説明できない。実際ラピッジは、その理由は不明だと認めている。[27] 一方でカ

ヴァッロは東方からローマへ向かう「難民」の中にテオドロスが含まれていた可能性を指摘している。[28]

ローマ滞在中のテオドロスについて、ラピッジは当時東方だけでなく西方のローマをも巻き込んだ単意論論争に彼が深く関与していたと主張する。[29] しかしラピッジの主張はいくつかの証拠や傍証を提示するものの、かなり推測に依拠しておりそのまま受け入れるのは困難である。テオドロスの単意論論争への関与について確実に言えることは彼がイングランドで主催したハットフィールド教会会議において単意論が否定されたということである。[30]

第2章　テオドロスの背景に関する史料の証言

第1節　ベーダの証言

カンタベリー大司教テオドロスがキリキア地方の都市タルソスで生まれたとする最も重要な情報源はベーダの『教会史』である。ベーダ（c．673―735年）は『教会史』の巻末で自身の経歴を述べているが、それによると彼は生涯を通してノーサンブリアにあったウィアマスとジャロウの修道院で暮らした。[31] ベーダ本人は自身が修道院やノーサンブリアの外に出たことがあるとは語っていない。彼はどのようにしてテオドロスの出身地を知ったのだろうか。

ベーダは『教会史』の序文でこの歴史書を書く上で何を情報源としたのかについて以下のように述べている。

> この小著を書くにあたって、作者、援助者となりましたのは……修道院長アルビヌスでした。（中略）しかし、それ以後から現在まで、聖なる教皇グレゴリウスの門弟たち、乃至それらの者の後継者たちによって……カンタベリ教会内で行われました事柄は……修道院長アルビヌスの努力により、ノゼルムを通じてわたしたちはこれを知りました。[32]

ベーダはハドリアヌスから修道院長職を継承したアルビヌスを「聖書の学問に非常に造詣深く、実際、ギリシア語を少なからず良く知り、しかも自己の母国語である英語に劣らずラテン語を知っていたほどである」と評価している。[33] またアルビヌスはテオドロスとハドリアヌスからカンタベリーでの教会職を授けられた。[34] そしてテオドロスとハ

ドリアヌスはカンタベリーの学校で聖書やラテン語、ギリシア語などを講じていた[35]。要するにアルビヌスは彼らの教え子だった。したがってアルビヌスを情報源としたベーダが伝えるテオドロスの出身地は不確かな伝聞に基づくものではないのである。

第2節「カンタベリーの聖書注解」の証言

以上のようなベーダの証言を考慮に入れると「カンタベリーの聖書注解」にはテオドロスが東方から渡来したことを示唆する記述が随所に認められる。

第一の例が聖書注解で引用ないし言及されている著述家の名前である。ラテン教父については、本論の第1章で述べたイシドールスの他に、ヒエロニムス（419年没）やヒッポのアウグスティヌス（430年没）への言及が見られる[36]。しかし、それ以上に際立ってギリシア教父などの東方の著述家が名指しされている。ギリシア教父についてはカイサレイアのバシレイオス（378年没[37]）、ナジアンゾスのグレゴリオス（390年頃没[38]）、エウァグリオス・ポンティコス（399年没[39]）、イオアンネス・クリュソストモス（407年没[40]）、サラミスのエピファニオス（403年没[41]）への言及や彼らからの引用が見受けられる。

彼ら以外の東方の著述家については、シリア教父エフライム（373年没[42]）および6世紀のエジプト出身の地誌学者コスマス・インディコプレウステース（没年不明[43]）からの引用が見られる。また「エンマウス（エマオ）」という地名は「イェルサレム総主教ソフロニオスが説明するように『兄弟の血』を意味する」という記述があるが[44]、ソフロニオス（638／9年没）は壮年期までのテオドロスと同時代人である。

こういった著述家からの引用に加えて、聖書内の語句に関する解説の中にはシリア語に言及するものがいくつか存在する。例えば『マルコの福音書』に関する注解において「『タビタ』はシリア語の単語であり、ラテン語では『プエッラ』である。……『エッファタ』はシリア語で『汝開かれよ』である[45]」と説明されている。

第二の例は東方の都市への言及である。例えば『民数記』に現れるウリ科の植物について「カンタベリーの聖書注解」は以下のように説明している。

ククメレースとペポネースは同じものである。しかし、

ククメレースは大きくなるとペポネースと呼ばれる。そして一つのペポンはしばしば30リブラの重さになる。エデッサの町ではペポネースはあまりに大きくなるので、一頭のラクダが二つのペポネースをほとんど運べなくなる。[46]

そして『ヨハネの福音書』における「12の籠と150モディウスの容量を有する6つの水瓶」について「幾人かの人々が断言するように、それらは皇太后ヘレナによってコンスタンティノープルに持ち込まれた」[47]とする説明がある。これとは別に、テオドロスがコンスタンティノープルで12の籠を目にしたということを伝える記述が断片的な写本に残されている。[48]

最後に『申命記』の注解は、ユーフラテス川について「アンティオキアから遠くには位置せず、北部の地域から西へ向き、約束の地に非常に近いマレ・パルドニクムへ流れ込む」と説明し「アンティオキア」に言及している。[49]

しかしこの説明は誤っており、ユーフラテス川はカッパドキアから南に向かい「マレ・パルドニクム」すなわち東地中海[50]には流れ込まない。「アンティオキア」の近くを流れ西に向かって東地中海に流れ込む川として該当するのは、キリキアのピュラモス川（現ジェイハン川）である。なぜならキリキアにもアンティオキアという名称の町が存在しており、ピュラモス川はその近くを流れていたからである。[51]このユーフラテス川の誤った説明は、カンタベリーでの聖書講義を聴講したイングランドの学生がその内容を誤解したまま記録した結果生じたと考えられている。[52]

第三の例がペルシア人と「サラケーニー」すなわちアラブ人への言及である。ペルシア人については『創世記』の注解において「しかしながら、ペルシア人とローマ人は宦官を彼らが去勢されない限り保有しなかった」という記述がある。[53]また『出エジプト記』に登場する「杯」について「受け皿のように丸くなく、長くて角度がある。ペルシア人はまだ宴会でそれを飲むために使っている」とする解説もある。[54]この注解で説明されるような長い角型の杯（角杯）は実際にササン朝ペルシアで使われており、動物の像が彫り込まれたものや動物の形をしたものが見つかっている。[55]

「サラケーニー（ギリシア語でサラケノイ）」とはアラビア半島やシリア・パレスティナ地域の内陸部の住民に対して用いられた呼称である。[56]その「サラケーニー」は『創世

記』の注解において次のように説明される。「したがって、イシュマエルの種族はサラケーニーの種族である。その種族は誰に対しても決して平和的ではなく、常に誰かと交戦している。[57]」「マディアニテース、イシュマエリテース、マディアニー、アガッレニーは現在不適切にサラケーニーと呼ばれる人々と同じ民族である。[58]」

古代末期に「サラケーニー」は『創世記』の登場人物であるハガルやその息子イシュマエルの子孫を指す「アガッレニー（ギリシア語でアガレノイ）」「イシュマエリテース（ギリシア語でイスマエリタイ）」と同一視されるようになり、そのような同一視は4世紀の教父サラミスのエピファニオスやヒエロニムスが行った。[59] テオドロスもその流れを汲んで、そのような説明をしている。

ベーダの証言に加えて、以上のような記述からもテオドロスが東方より渡来した人物だったことは間違いない。

第3章　東方におけるテオドロスの経歴

第1節　テオドロスの学問的研鑽

テオドロスが生まれたタルソスの学校は古代末期の史料では言及されていない。[60] そのことだけで当時のタルソスに学問的あるいは教育的活動が全く存在しなかったとは断言できないが、タルソスに近く、そういった活動がより盛んな都市としてアンティオキアが挙げられる。アンティオキアでは4世紀後半に修辞学教師のリバニオスが学校を開いており、その学校は聖書解釈者であるイオアンネス・クリュソストモスやモプスエスティアのテオドロス（428年没）を輩出した。そして二人はタルソスのディオドロス（394年頃没）とも関係を築いた。[61]

ラピッジによると「アンティオキア学派」と称されるこの3人の聖書解釈は字義的な意味の解明に重きを置き、異同のある聖書原文の比較、語源辞典などの補助的な資料および哲学、修辞学、医学といった学問への参照を通して行われた。そして同様の手法はガバラのセウェリアノス（408年没）やキュロスのテオドレトス（466年没）、コスマス・インディコプレウステースの著作にも見られる。[62]

「アンティオキア学派」の伝統はいくつかの困難に直面した。というのもモプスエスティアのテオドロスの弟子であるネストリオスが431年にエフェソス公会議で異端として裁かれ、553年には第二コンスタンティノープル公

会議でテオドロスやキュロスのテオドレトスなどが作成した文書が糾弾されたからである。しかしその伝統はイオアンネス・クリュソストモスなどの著作の中で生き延びた。[63]

ラピッジが言うように「カンタベリーの聖書注解」は「アンティオキア学派」的な傾向を有している。[64] 例えば、第2章で見てきた「エンマウス」という地名の由来、「タビタ」や「エッファタ」の語源、ウリ科の植物、ペルシア人の角杯、そして誤ったまま記録されたユーフラテス川の説明がその傾向を示している。またイオアンネス・クリュソストモスが7度引用されていることからも、[65] 将来のカンタベリー大司教テオドロスが「アンティオキア学派」的な手法で聖書解釈の修練を積んだことは間違いない。

ラピッジはこういったことに加えて、タルソスがアンティオキア総主教管区に含まれたこと、上述のような4―5世紀の聖書解釈者の時代以降も、6世紀後半から7世紀の前半にかけてアンティオキアでの著述活動が継続していたことなどからテオドロスはそこで聖書解釈の訓練を受けたと考える。[66]

ただし、ラピッジも認めるように「アンティオキア学派」の聖書解釈に関する著作はアンティオキア以外のギリシア語圏の都市でも利用できた。[67] また「アンティオキア学派」が活躍した4―5世紀からテオドロスの時代（7世紀）までの期間は彼らの聖書解釈を他のギリシア語圏の都市や学校、修道院へ伝播させるのに十分な時間を与えたであろう。したがってテオドロスがアンティオキアで「アンティオキア学派」の手法を身に着けたと断定することはできない。

第2章で示した「カンタベリーの聖書注解」におけるエデッサやコンスタンティノープルへの言及は実際の経験が反映されたかのように具体的である。エデッサはシリアの内陸部に位置し、4世紀の著名なシリア教父エフライムが活躍した都市である。そして7世紀に聖書解釈者エデッサのヤコボス（c．640―708年）がそこで活動しており、学問的活動は継続していた。[68]

しかしながら、仮にテオドロスがエデッサへ赴いたとしても、彼がそこで勉学に励んだかどうかははっきりしない。確かに「カンタベリーの聖書注解」はシリア語に言及し、[69] エフライムの著作を引用している。[70] しかし「タビタ」や「エッファタ」をシリア語であるとする説明だけではテオドロスがどの程度シリア語を理解していたかは分からず、エフライムからの引用はシリア語からではなくギリシア語の翻訳

を通して行われた[71]。

コンスタンティノープルへの言及は明らかにテオドロスがそこに赴き、聖遺物を目撃したことを示している[72]。ヘラクレイオス治世期（610―41年）のコンスタンティノープルは彼やコンスタンティノープル総主教セルギオス（610―38年）の後援の下、歴史家テオフュラクトス・シモカッテース（641年以降没）、詩人ピシディアのゲオルギオス（632年頃没）、医学者テオフィロス・プロトスパタリオス、そして哲学や医学に通じたアレクサンドリアのステファノス（635年頃没）などの学識者が活動していた[73]。

「カンタベリーの聖書注解」は哲学や医学に関連する解説を含んでいる。『創世記』の解説ではラテン語のフィルマメントゥム（天を意味する）を「哲学者たちはアプラネースと呼んだ。アプラネースにおいて7つの惑星を除く全ての星々が釘のように固定される」とする説明が見られる[74]。フィルマメントゥムを「哲学者たち」は「アプラネース」と呼ぶという説明は他の箇所にも見受けられる[75]。

ラピッジによると「アプラネース」はギリシア語の単語であるが、ギリシア語訳旧約聖書（セプトゥアギンタ）ではこの単語の代わりに「ステレオーマ」が用いられ、ギリシア教父の著作でも「アプラネース」が使われることは稀であった。そして「アプラネース」はプラトンの『ティマイオス』やアリストテレスの『気象論』で使われた[76]。

「カンタベリーの聖書注解」における医学的解説としては熱病や精神異常の説明などが挙げられる。例えば『マタイの福音書』の注解には「三日熱は肝臓の胆汁から生じる。……四日熱は脾臓から生じる。……継続的な熱病は6時間の寛解を除いて昼夜を問わず続く」といった説明が見出される[77]。また以下のように月の満ち欠けが精神に及ぼす影響について説明している。「……精神錯乱者は月の満ち欠けによって落ち込んだり自分自身を衰弱させたりする人々であると言われている[78]。」

ラピッジは以上のような哲学的ないし医学的知識をテオドロスがコンスタンティノープルで習得したと考えている。ヘラクレイオス帝によってコンスタンティノープルに招かれたアレクサンドリアのステファノスがアリストテレスなどの哲学に通じていたこと、彼がヒポクラテスやガレノスの著作について講じる際、上述の熱病や精神異常について説明したこと、そして「カンタベリーの聖書注解」に

おけるコンスタンティノープルへの言及などがその根拠である。[79]

第2節　7世紀のビザンツにおける文芸文化

他方でカヴァッロは7世紀のコンスタンティノープルが有した文化的な影響力について異論を呈する。彼によると、当時のコンスタンティノープルが緩やかに文化的衰退を示すのとは対照的に、地方の属州は文化的な継続を示した。確かにヘラクレイオス治世期のコンスタンティノープルは文化的な繁栄を享受したが、それはつかの間のものであり、その後の世代には何ら影響を遺さなかった。[80]

アレクサンドリアのステファノスが示すのはエジプトのアレクサンドリアにおける学問的伝統であり、彼が亡くなった際、ヘラクレイオスは後任の教師として遠方のトレビゾンドからテュキコスという彼の教え子を招こうとしたが、断られてしまった。[81] つまりコンスタンティノープルの中から彼らのような人材を補充することができなかった。アテナイ出身だったステファノス自身が学びを求めて選んだのはアレクサンドリアだったことも、そのコンスタンティノープルとの学問的な水準の差を示している。[82]

アレクサンドリアの教育の影響はアルメニアにまで及んだ。アナニア・シラカツィ（685年没）は前出のテュキコスを介してアレクサンドリアの教育に触れ、その教育課程をアルメニアの学校に導入した。[83] またアレクサンドリアに由来するアリストテレスなどの哲学の手引書はシリアやパレスティナで利用することができた。[84]

シリアやパレスティナ、エジプトには詩の様式の一つであるギリシア語によるアナクレオン体の伝統が存在した。その担い手として6世紀前半の詩人ガザのイオアンネス、シリアのダマスコス出身で晩年にイェルサレム総主教となるソフロニオス、エジプト出身の文法家ゲオルギオス、そして8―9世紀に活躍したエリアス・シュンケロスとミカエル・シュンケロス（共にイェルサレム出身）が挙げられる。[85]

そしてギリシア語文化の伝播は西方のビザンツ領であるシチリアやローマに及んだ。おおよそ10―11世紀頃に成立したと見られる[86]『モネンバシア年代記』によると6世紀末以降にギリシアからシチリア島を含む南イタリアへ向かう移民が存在した。[87]

また7世紀以降の東方におけるペルシアやアラブの侵入

はシチリアやローマへ向かう「難民」の流れを生み、7世紀から8世紀にかけて東方出身者やその子孫から、例えばテオドルス1世（642―49年）やアガト（678―81年）、セルギウス1世（687―701年）、ザカリアス（741―52年）などの教皇が輩出された。[88]

7世紀のシチリアではギリシア語による教育が行われ「ギリシア系」およびシチリア出身の教皇の中には高い教養を身に着けた者もいた。また聖人伝や聖書注解の執筆、聖歌の作詞も行われた。[89] 662年頃にはビザンツ皇帝コンスタンス2世が軍隊と共にシュラクサへ渡って宮廷を置いており、シチリアは政治的にも軍事的にも重要な地域だった。[90]

一方7世紀のローマでは東方出身の修道士が修道共同体を形成し、ギリシア語文化の伝播に大きな役割を果たした。彼らの修道共同体としては「レナトゥス」と呼ばれたアルメニア系の修道院、「ボエティアナ」と呼ばれた「東方教会」のそれ、パレスティナ系の聖サバ修道院、そしてタルソスのテオドロスと同じキリキア出身者の修道院「アド・アクアス・サルウィアス」が知られている。[91]

そして649年のラテラノ公会議の議事録が当初ラテン語ではなくギリシア語で作成されたことは、[92] この当時のローマ教会においてギリシア語が強い影響力を有していたことを示す。カヴァッロは「ギリシア系」修道士たちがギリシア語文献を収集し、当時のローマで利用できるようにしたと考えている。[93]

カヴァッロの見解を総括すると、テオドロスはシリアやパレスティナ、エジプトでもコンスタンティノープルに匹敵する、あるいはそれ以上の水準を有する文化的活動や学識者に接触でき、シチリアやローマにおいてもギリシア語による学問的研鑽を継続し得たのである。[94]

カヴァッロの指摘は重要である。しかし、たとえつかの間の、属州からの人材に依存したものだったとしても、ヘラクレイオス治世期（610―41年）のコンスタンティノープルが文化的繁栄を享受したこともまた事実である。カヴァッロ自身もテオドロスがコンスタンティノープルで前出のステファノスの講義を聴講した可能性は否定していない。[95]

いずれにせよテオドロスの学識がシリア、パレスティナ、エジプトからコンスタンティノープルへ、あるいはシチリアやローマへ及んだギリシア語文化の潮流において育まれ

たのは確かである。そしてその流れの一端はテオドロスを通してイングランドのカンタベリーの学校にまで達したのである。[96]

第3節　テオドロスと戦争

7世紀以降、東方のビザンツ領は立て続けに戦争へと巻き込まれた。611年にササン朝ペルシアはアンティオキアを、613年にはダマスコスとテオドロスの故郷であるタルソスを、翌年にはイェルサレムを、619年にはアレクサンドリアを占領した。その後626年にコンスタンティノープルが包囲されるなどの苦戦を強いられたが、ヘラクレイオスは627年にニネヴェで決定的勝利を収め、和平交渉によって失地を全て回復した。[97]

634年以降、アラブのビザンツ侵攻が始まり、636年にシリアのヤルムークでビザンツ軍は大敗した。この敗戦後、アンティオキアで指揮を執ったヘラクレイオスはシリアから撤退した。これ以降シリアやパレスティナはアラブに占領されていき、638年には総主教ソフロニオスが彼らにイェルサレムを明け渡した。そして642年にはアレクサンドリアも占領され、ビザンツはペルシアから取り戻した領土を再び失った。[98]

ラピッジもカヴァッロもテオドロスがこういった戦争から逃れる「難民」だったと推測している。[99] とりわけラピッジは「カンタベリーの聖書注解」における「サラケーニー」は「誰に対しても決して平和的ではなく、常に誰かと交戦している」[100]という辛辣な説明に戦争の経験が反映されたと推測する。[101]

しかし、テオドロスから見て「サラケーニー」と同様に侵略者であったペルシア人への言及[102]にはそのような傾向は見られない。ペルシアが613年にタルソスを占領した時、テオドロスはおよそ11歳の子供だったので、その場にいた可能性が高く、その時にペルシア人の角杯や宴会を観察したのかもしれない。一方アラブの侵攻が始まった時、テオドロスはすでに30代に達しており、彼がどこにいたのかは定かではない。

実のところ「サラケーニー」を好戦的な人々と見なす下地は630年代以前からすでに出来上がっていた。6世紀の歴史家プロコピオスは彼らが「エジプトからペルシア国境までの土地に住むローマ人を絶え間なく攻撃し続け、少しも休むことなく殺戮を繰り返していた」と述べている。[103]

またシリアやパレスティナの境域では630年代以前から「サラケーニー」による襲撃は起きていた。[104] 直接彼らと接触する機会がなかったとしても、東方において彼らに対する辛辣な評判を耳にする機会はあったであろう。

したがって「常に誰かと交戦している」という説明は630年代以前から東方で培われてきた彼らに対する認識を表明したものと見ることもできる。つまりこの記述をテオドロスが630年代以降のアラブの侵攻に直面した証拠として採用するのは難しいのである。

一方アラブによる征服に伴い、シリアやパレスティナからギリシア語話者のエリート層の多くが残されたビザンツ領へ脱出したことが指摘されている。[105] ゆえにテオドロスが「難民」ではなかったと主張することも困難である。また彼が630年代以前にコンスタンティノープルや西方に渡っていたとしても、アラブの席巻によって帰郷は困難になったであろう。いずれにせよ彼は戦争の影響から無縁ではいられなかった。

第4章　テオドロスと単意論論争

第1節　単意論の出現と推移

単意論は単働論から派生した教義である。単働論は620年代にカルケドン派と単性論派などの非カルケドン派を統合する試みのために生み出された。[106]

633年にアレクサンドリア総主教キュロスは一部のカルケドン派と「単性論」派の統合に成功した。この統合において考案された教義は、キリストが「二つの本性において」存在し、なおかつ「二つの本性から」由来しており、一つの働き（活力、エネルゲイア）を有しているというものである。翌年にコンスタンティノープル総主教セルギオスや教皇ホノリウスもこの教義を承認した。[107]

同年以降、イェルサレム総主教ソフロニオスから単働論に対する反対の声が上がる一方で、ヘラクレイオス帝はセルギオスによって作成された『エクテシス』を638年に発布した。そして『エクテシス』の中で単意論として糾弾されることになる教義が以下のように表明された。

……いかなる時にも、理知的な魂によって生かされた

その肉体　は、実体（ヒュポスタシス）に即して自分と合一された神なる言（ロゴス）の決意に反する固有の衝動によって、それとは切り離されたものとして自分の本性（フュシス）的活動を感じ取ったことはなく、神なる言（ロゴス）が欲されたことを、欲されたままに、欲されたようにいつも〔欲した〕というように、我らの主イエス・キリスト、真の神の唯一の意思を我々は信仰告白する。[108]……

ソフロニオスの没後（638／39年）も、彼の弟子である証聖者マクシモス（662年没）によって反対運動は続けられた。[109] マクシモスはピュロスとの討論において単意論と『エクテシス』を非難し、キリストは二つの本性、意思、働きを有すると主張している。[110] そして649年に、マクシモスに促される形で教皇マルティヌス1世（649―55年）はラテラノ公会議を招集し、その決議においてセルギオスらと共に単働・単意論は糾弾された。しかしこの公会議は皇帝コンスタンス2世に反逆と見なされ、マルティヌスとマクシモスは捕らえられて流刑に処された。なぜならコンスタンスは648年にキリストにおける意思あるいは活力の数量に関する議論を禁じた勅令『テュポス』を発布していたからである。[111]

その後、670年代後半になってから皇帝コンスタンティノス4世と教皇アガトによる和解のための歩み寄りがようやく見られた。そして680―1年の第三コンスタンティノープル全地公会議において単意論は公式的には東西一致で排斥された。[112]

第2節　テオドロスと単意論

移動の理由や過程、時期ははっきりしないが、東方で学識を育んだテオドロスはローマに渡った。そこでテオドロスが何をしていたかは不明である。カヴァッロが言うように、彼がここでもギリシア語による勉学を継続した可能性はある。[113] 他方でラピッジはテオドロスがローマで単意論論争に関与したと主張する。[114]

649年のラテラノ公会議の議事録にはマクシモスや当時ローマに存在したキリキア出身者の修道院の院長ゲオルギオスの署名がある。またこの議事録の調印者の名簿の中に「修道士テオドルス」という署名が含まれている。[115]

680年にラテラノ宮殿で教会会議が開催され、全西方教会の統一見解について話し合われた。[116] この教会会議の後、

西方教会の立場を説明する書簡がアガトから皇帝コンスタンティノス４世に送られた。その書簡の中でアガトは争点となっている神学上の複雑な問題を解明するには、一致して優れた巧妙さと学識を有する思想家が必要であることを指摘した上で次のように述べる。「それゆえに、我々は我らが共同の奉仕者にして共同の司教、大ブリテン島の哲学者にして大司教たるテオドロスが、今日まで生存している幾人かの他の人々と共に、我々の企てに加わるだろうと期待していた。[117]」

ラピッジはこの陳述を６４９年におけるラテラノ公会議の議事録起草にテオドロスが関与したことがアガトの時代になってもまだ記憶されていたことを示すものとして見ている。そして「カンタベリーの聖書注解」における「エンマウス」という地名の由来に関する説明[118]がソフロニオスの現存する著作に見出されないこと、および６３０年代初めにソフロニオスはコンスタンティノープルに滞在しており、同時期にテオドロスが同地に滞在していたと考えられることから「エンマウス」の由来は直接テオドロスに伝えられた可能性、すなわちソフロニオスとの個人的な接触の可能性を指摘している。[119]

さらにラピッジは「カンタベリーの聖書注解」に述べられるキリストの肉体における「自然的な」誕生と洗礼における「霊的な」誕生の主張[120]がマクシモスの『アンビグア』にも認められること、および当時の東方教会において批判される傾向にあった「フィリオクェ（父と子からの聖霊の二重発出）」を支持している点でテオドロスとマクシモスが一致していることも指摘する。[121]

以上のようにラピッジは「カンタベリーの聖書注解」に単働・単意論への中心的な反対者だったソフロニオスやマクシモスとの繋がりが見出されること、および前出のアガトの書簡における陳述、そして公会議の議事録における「修道士テオドルス」の署名などの証拠や傍証を組み合わせることによって、テオドロスが単意論論争に関与していたと主張している。[122]

確かにアガトの陳述をテオドロスの学識がイングランドに渡ってからもローマで記憶され続けた証拠と見なすのは妥当であろう。しかし聖書注解におけるソフロニオスおよびマクシモスとの繋がりが個人的な接触を通じて得られたものと断定することは出来ず、現存していないものを含む彼らの著作から得られた可能性も否定できない。そして『後

期ローマ帝国のプロソポグラフィー』から明らかなように「テオドロス」は当時広く見られる人名であった。[123] 実際、マルティヌス1世の先代教皇はテオドルスという名前である。またタルソスのテオドロスがいつローマに渡ったのか、すなわち649年のラテラノ公会議以前に彼がローマにいたのかは明らかでない。したがってラピッジの仮説は推測の域を出ないであろう。

ただし、ハドリアヌスが自身に代わるカンタベリー大司教の候補としてテオドロスの名前を挙げたこと、[124] またイングランドへ渡った後も彼が「哲学者」としてアガトに記憶されていたことから、少なくともそのような評判が生じる何らかの活動を彼がローマで行ったのは確かである。

テオドロスと単意論の関係で重要なのは彼の存在によって単意論論争の余波がイングランドにまで及んだということである。ベーダは679／80年にイングランドのハットフィールドで開催された単意論論争との関連を強く示す教会会議について以下のように伝えている。

当時テオドルスは、コンスタンチノポリス教会の信仰がエウティケス異端によって非常に害されていたことを聞き、彼が統轄していたイギリス人の教会がこのような汚点をずっと免れるように望み、尊敬すべき司教や多くの博士たちの集会を催し、彼らの有する各々の信仰について熱心に調べたが、皆の者の共通感情がカトリックの信仰に一致しているのを見出した。（中略）「またわれらは、最も敬虔なコンスタンティヌスの統治第九年、十五年期第八年、最も祝福されたる教皇マルティヌスの時代にローマで開催された教会会議を承認する。……」[125]

649年のラテラノ公会議が承認されている文脈を考慮するとベーダの言う「エウテュケス異端」というのは恐らく単意論派のことであろう。そしてこの教会会議が679／80年に開催された事実は、670年代後半から単意論に関して東西教会の和解が模索されていたことやアガトが論争を解決するためにテオドロスの参加を期待していたことを想起させる。

そのうえベーダによるとこの教会会議には先立ってローマから派遣されていた音楽監督のヨハンネスが参加していた。彼はアガトの命で聖歌の指導に当たっていたが、それ

以外に「イギリス人の教会がどんな信仰のものであるかを良く知って、それをローマに戻ってから報告する」任務も受けていた。さらに彼は649年のラテラノ公会議の決議を持参していた。[126]

ことによるとヨハンネスはアガトが抱いた期待をテオドロスに伝えた可能性があり、もしそうであればハットフィールド教会会議はその返答だった。実際にハットフィールド教会会議の決議はアガトに届けられた。[127]西方教会が単意論に反対する点で一致していることを東方教会に示すために、アガトはこの教会会議の決議を必要としたのである。[128]

以上のようにテオドロスが主催したハットフィールド教会会議は、ローマとコンスタンティノープルの和解に向けた歩み寄りと連動して計画されたと考えられる。教義論争の解決を期待されるほど学識を高く評価されたテオドロスがカンタベリー大司教になったことで、イングランド教会はビザンツ帝国で生じたこの論争と関わりを持つに至ったのである。

結論

今まで述べてきたことから明らかなのは「カンタベリーの聖書注解」は、タルソス出身のカンタベリー大司教テオドロスの経歴上の空白に対する手掛かりとなる興味深い情報をもたらすが、それでも彼がどこで何をしたのかについて、確実なことはほとんど分からないということである。

彼が具体的にどこで学問的研鑽を積んだかについて確定できることはほとんどない。確かに「カンタベリーの聖書注解」はエデッサ[129]やコンスタンティノープル[130]へ言及している。しかし、仮にテオドロスがそれらの都市に赴いたことがあったとしても、直ちにそこで勉学に励んだということにはならない。

カヴァッロが明らかにしたように、当時のビザンツ世界において高い教養を身に着けるのに必ずしもコンスタンティノープルでの滞在を必要とはしなかった。7世紀のビザンツ世界におけるギリシア語文化は、アレクサンドリアのステファノスやシチリアとローマに移住した東方出身者などの例が示すようにコンスタンティノープルの外でも継続し隆盛した。[131]

「カンタベリーの聖書注解」に認められるギリシア教父などの様々な著述家、あるいは哲学や医学などの知識はテオドロスがそういった知的環境で育まれたことを立証する。またそれは、テオドロスが聖俗両方の文献とギリシア語やラテン語に精通していたとするベーダの証言[132]が誇張ではないことも証明する。要するにたとえ彼の経歴が明確にならずとも、この聖書注解によって彼の具体的な学識の一端に触れることは可能である。

そして何よりも重要なのは、テオドロスやハドリアヌスがカンタベリーで教育に励んだことである[133]。つまりシリア、パレスティナ、エジプトからコンスタンティノープルやシチリア、ローマに及んだギリシア語文化の潮流が、彼らによってイングランドのカンタベリーにまで達したということである[134]。それはカンタベリーの学校に通った生徒たちがこの潮流の一端に触れることができたということを意味する。

他方でテオドロスはローマに渡り、教皇アガトから単意論論争の解決を期待されるだけの学問的な評判を博した[135]。そしてテオドロスがカンタベリー大司教となったことで、ビザンツ帝国から生じた教義論争の余波がローマを経てイングランドまで及ぶことになった。それは単意論を巡る東西教会の和解の試みと連動した６７９／８０年のハットフィールド教会会議という形で現れた[136]。

以上のように、タルソス出身のテオドロスによってイングランドと遠く離れたビザンツ世界は邂逅した。７世紀後半にカンタベリーを有するイングランドは、テオドロスを通してギリシア語文化の潮流に触れ、単意論論争に巻き込まれるほどのビザンツ世界との繋がりを得たのである。

注

（1）ベーダ（長友栄三郎訳）『イギリス教会史』創文社、１９６５年、２６０項（以下ベーダ『教会史』とする）。

（2）ベーダ『教会史』、２６１、３７７項。

（3）Cook, A.S., 'Theodore of Tarsus and Gislenus of Athens', in *Philological Quarterly* vol.2, the University of Iowa, 1923, pp.1-25, HathiTrust(https://catalog.hathitrust.org/Record/000496962)（最終閲覧日２０２０年12月22日）より。

（4）Bishoff, Bernhard, Michael Lapidge(eds.), *Biblical Commentaries from the Canterbury School of Theodore and Hadrian*, Cambridge, 1994（以下 *Biblical Commentaries* とする）. *Biblical Commentaries* に収録された序論（1—7章 pp.1-295）や英訳、原文に対する解説（pp.427-532）や付

録（pp.533-565）、索引はラピッジによるものである（p. viii を見よ）。

（5）Lapidge, Michael(ed.), *Archbishop Theodore*, Cambridge, 1995（以下 *Theodore* とする）.

（6）Lapidge, 'The career of Archbishop Theodore', in *Theodore*, pp.1-29（以下 Lapidge, 'The career' とする）.

（7）Lapidge, 'The career', pp.11-19.

（8）Cavallo, Guglielmo, 'Theodore of Tarsus and the Greek culture of his time', in *Theodore*, pp.54-67（以下 Cavallo, 'the Greek culture' とする）.

（9）Lapidge, 'The career', pp.22-4.

（10）Chadwick, Henry, 'Theodore, the English church and the monothelete controversy', in *Theodore*, pp.88-95（以下 Chadwick, 'the monothelete controversy' とする）.

（11）*Biblical Commentaries*, p.49, n.220.

（12）例えば、サザーン、R.W.（上條敏子訳）『西欧中世の社会と教会』八坂書房、２００７（原著１９７０年）、54項、および青山吉信編『世界歴史大系　イギリス史１』山川出版社、１９９１年、１０９項を見よ。

（13）Cook, 'Theodore of Tarsus and Gislenus of Athens', p.4.

（14）*Biblical Commentaries*, pp.49-50, n.220.

（15）Scheil, Andrew, 'Theodore of Tarsus', in Nicholson, Oliver(ed.), *The Oxford Dictionary of Late Antiquity* (vol.2), Oxford, 2018, pp.1478-9（以下 *ODLA* とする）.

（16）*Biblical Commentaries*, pp. vii , 1.

（17）*Biblical Commentaries*, pp. vii - viii .

（18）*Biblical Commentaries*, p.1.『語源誌』からの引用は pp.354-7, 388-9 に見られる。

（19）cesaring の使用については *Biblical Commentaries*, pp.328-9, 330-1, 338-9, 382-3 を、pending の使用については pp.338-9, 396-7 を見よ。

（20）*Biblical Commentaries*, pp.408-9.

（21）Bosworth, Joseph, T.Northcote Toller, *An Anglo-Saxon Dictionary*, Oxford, 1973, p.646. ロプストラン（lopustran）は複数形で、単数形ではロプストレ（lopustre）という。ロプストレにはバッタという意味もある。

（22）「テオドルス」については *Biblical Commentaries*, pp.326-7, 549 を、「ハドリアヌス」については pp.535, 543 を見よ。

（23）*Biblical Commentaries*, pp.1-2.

（24）Lapidge, 'The career', pp.3-19.

（25）Cavallo, 'the Greek culture', pp.54-67.

（26）Lapidge, 'The career', p.10.

（27）Lapidge, 'The career', p.19.

（28）Cavallo, 'the Greek culture', p.67.

（29）Lapidge, 'The career', pp.22-24.

（30）ベーダ『教会史』３０６―８項。

（31）ベーダ『教会史』４５５―６項。

（32）ベーダ『教会史』４項。

(33) ベーダ『教会史』４２５項。
(34) ベーダ『教会史』４項。
(35) ベーダ『教会史』２６４項。
(36) ヒエロニムスについては *Biblical Commentaries*, pp.298-301, 388-9を、アウグスティヌスについてはpp.390-1を見よ。
(37) *Biblical Commentaries*, pp.386-7.
(38) *Biblical Commentaries*, pp.306-7.
(39) *Biblical Commentaries*, pp.298-9, 378-9.
(40) *Biblical Commentaries*, pp.306-7, 310-11, 392-3, 396-7, 404-5, 412-3, 414-5.
(41) *Biblical Commentaries*, pp.300-1, 322-3, 378-9.
(42) *Biblical Commentaries*, pp.402-3.
(43) *Biblical Commentaries*, pp.320-1.
(44) *Biblical Commentaries*, pp.310-11.
(45) *Biblical Commentaries*, pp.408-9. プエッラは少女を意味する。
(46) *Biblical Commentaries*, pp.374-5. ククメレース（cucumeres）とペポネース（pepones）は複数形であり、単数形はそれぞれククミス（cucumis）とペポン（pepon）である。ククミスは「きゅうり」を、ペポンは「メロン」を意味するが、この場では両方ともメロンやスイカの類を指している。*Biblical Commentaries*, p.490.
(47) *Biblical Commentaries*, pp.394-5.
(48) Lapidge, 'The career', p.13; *Biblical Commentaries*, pp.549-52.
(49) *Biblical Commentaries*, pp.382-3.
(50) *Biblical Commentaries*, p.474.
(51) *Biblical Commentaries*, pp.495-6.
(52) *Biblical Commentaries*, p.496.
(53) *Biblical Commentaries*, pp.340-1.
(54) *Biblical Commentaries*, pp.356-7.
(55) *Biblical Commentaries*, p.478; 足利惇氏『世界の歴史　第９巻　ペルシア帝国』講談社、１９７７年、３６１項。
(56) 小林功『生まれくる文明と対峙すること』ミネルヴァ書房、２０２０年、２０５―６項（以下小林『生まれくる文明』とする）。
(57) *Biblical Commentaries*, pp.324-5.
(58) *Biblical Commentaries*, pp.338-9.
(59) *Biblical Commentaries*, pp.455-6; 小林『生まれくる文明』２０６項。
(60) Lapidge, 'The career', p.3.
(61) Lapidge, 'The career', p.4.
(62) Lapidge, 'The career', pp.4-5.
(63) メイエンドルフ、ジョン（鈴木浩訳）『ビザンティン神学』新教出版社、２００９年、43項。
(64) Lapidge, 'The career', p.5.
(65) *Biblical Commentaries*, pp.306-7, 310-11, 392-3, 396-7, 404-5, 412-3, 414-5.
(66) Lapidge, 'The career', pp.5-6.

(67) Lapidge, 'The career', p.6.
(68) Lapidge, 'The career', p.7.
(69) *Biblical Commentaries*, pp.408-9.
(70) *Biblical Commentaries*, pp.402-3.
(71) *Biblical Commentaries*, p.514; Lapidge, 'The career', p.8.
(72) Lapidge, 'The career', p.13; *Biblical Commentaries*, pp.394-5, 549-52.
(73) Lapidge, 'The career', pp.13-16.
(74) *Biblical Commentaries*, pp.304-5.
(75) *Biblical Commentaries*, pp.306-7.
(76) *Biblical Commentaries*, pp.433-4; Lapidge, 'The career', p.18.
(77) *Biblical Commentaries*, pp.398-9.
(78) *Biblical Commentaries*, pp.404-5.
(79) Lapidge, 'The career', pp.16-19.
(80) Cavallo, 'the Greek culture', pp.54-5.
(81) Cavallo, 'the Greek culture', pp.55-6.
(82) Cavallo, 'the Greek culture', p.58.
(83) Cavallo, 'the Greek culture', p.59.
(84) Cavallo, 'the Greek culture', pp.59-60.
(85) Cavallo, 'the Greek culture', pp.61-2.
(86) Kazhdan, Alexander, 'Chronicle of Monemvasia', in Kazhdan(ed.), *The Oxford Dictionary of Byzantium*(vol.1), Oxford, 1991, p.445.
(87) 小林『生まれくる文明』258項、注（58）。
(88) シンメルペニッヒ、ベルンハルト（甚野尚志他訳）『ローマ教皇庁の歴史』刀水書房、2017年、81項。
(89) Cavallo, 'the Greek culture', pp.63-4.
(90) 小林『生まれくる文明』120—1項。
(91) Lapidge, 'The career', pp.19-20.「東方教会」とはペルシア領内のキリスト教会のことで、現在「アッシリア東方教会」と呼ばれる教会はこの「東方教会」に起源を有する。以前は「ネストリオス派」とも呼ばれたが、現在その名称は使わないようになっている。Coakley, J.F., 'Church of the East', in *ODLA*(vol.1), p.343.
(92) Cavallo, 'the Greek culture', p.64; Neil, Bronwen, 'Lateran Council of 649', in *ODLA*(vol.2), pp.881-2.
(93) Cavallo, 'the Greek culture', pp.64-5.
(94) Cavallo, 'the Greek culture', pp.66-7.
(95) Cavallo, 'the Greek culture', p.66.
(96) Cavallo, 'the Greek culture', p.67.
(97) Lee, Doug, 'Persian-Roman Wars', in *ODLA*(vol.2), pp.1174-5; オストロゴルスキー、ゲオルグ（和田廣訳）『ビザンツ帝国史』恒文社、2001年、134—141項（以下オストロゴルスキー『ビザンツ帝国史』とする）。
(98) Clarke, Nicola, 'Arab conquest, Palestine, Syria, and Roman Mesopotamia', in *ODLA*(vol.1), p.108; オストロゴルスキー『ビザンツ帝国史』148—9項；小林『生まれくる文明』22項。
(99) Cavallo, 'the Greek culture', p.66; Lapidge, 'The career', p.10.

(100) *Biblical Commentaries*, pp.324-5, 455-6.
(101) *Biblical Commentaries*, pp.455-6; Lapidge, 'The career', p.10.
(102) *Biblical Commentaries*, pp.340-1, 356-7.
(103) プロコピオス（和田廣訳）『秘史』京都大学学術出版会、２０１５年、１４０項。
(104) 小林『生まれくる文明』23項。
(105) パーキー、ジョナサン（野元晋、太田絵里奈訳）『イスラームの形成』慶應義塾大学出版会、２０１３年、１２７項。
(106) Louth, Andrew, 'Monotheletes', in *ODLA*(vol.2), pp.1034-5.
(107) Chadwick, 'the monothelete controversy', pp.89-91.
(108) 小高毅編『原典　古代キリスト教思想史２　ギリシア教父』教文館、２０００年、４７１―２項（以下小高『原典ギリシア教父』とする）。
(109) Lapidge, 'The career', pp.21.
(110) 小高『原典ギリシア教父』、４８１―３項。
(111) Louth, Andrew, 'Monotheletes', in *ODLA*(vol.2), pp.1034-5.
(112) Lapidge, 'The career', pp.22-4.
(113) Cavallo, 'the Greek culture', pp.66-7.
(114) Lapidge, 'The career', pp.22-4.
(115) Lapidge, 'The career', p.23.
(116) Lapidge, 'The career', p.23.
(117) Lapidge, 'The career', p.23（アガトの書簡は本文中の下記の英訳より再引用、'We were hoping, therefore, that Theodore, our co-servant and co-bishop, the philosopher and archbishop of Great Britain, would join our enterprise, along with certain others who remain there up to the present day'）.
(118) *Biblical Commentaries*, pp.310-11.
(119) Lapidge, 'The career', pp.23-4.
(120) *Biblical Commentaries*, pp.400-1.
(121) Lapidge, 'The career', p.24.
(122) Lapidge, 'The career', p.24.
(123) Martindale, J.R., *The Prosopography of The Later Roman Empire Vol.III A.D.527-641*, Cambridge, 1992, pp.1244-1289.
(124) ぐーダ『教会史』３０６―８項
(125) ぐーダ『教会史』３０６―８項。
(126) ぐーダ『教会史』３０９―１１項。
(127) Chadwick, 'the monothelete controversy', p.93; ぐーダ『教会史』３１１項。
(128) Chadwick, 'the monothelete controversy', p.92.
(129) *Biblical Commentaries*, pp.374-5.
(130) Lapidge, 'The career', p.13; *Biblical Commentaries*, pp.394-5, 549.
(131) Cavallo, 'the Greek culture', pp.54-67.
(132) ぐーダ『教会史』２６０項。
(133) ぐーダ『教会史』２６４項。
(134) Cavallo, 'the Greek culture', p.67.
(135) Lapidge, 'The career', p.23.
(136) ぐーダ『教会史』３０６―１１項。

文献目録

史料

Bishoff, Bernhard, Michael Lapidge(eds.), *Biblical Commentaries from the Canterbury School of Theodore and Hadrian*, Cambridge, 1994.

プロコピオス（和田廣訳）『秘史』京都大学学術出版会、２０１５年

ベーダ（長友栄三郎訳）『イギリス教会史』創文社、１９６５年。

研究文献

Bosworth, Joseph, T.Northcote Toller, *An Anglo-Saxon Dictionary*, Oxford, 1973.

Cook, A.S., 'Theodore of Tarsus and Gislenus of Athens', in *Philological Quarterly* vol.2, the University of Iowa, 1923, pp.1-25.
HathiTrust(https://catalog.hathitrust.org/Record/000496962)（最終閲覧日２０２０年12月22日）より。

Cavallo, Guglielmo, 'Theodore of Tarsus and the Greek culture of his time', in Lapidge, Michael(ed.), *Archbishop Theodore*, Cambridge, 1995, pp.54-67.

Chadwick, Henry, 'Theodore, the English church and the monothelete controversy', in Lapidge(ed.), *Archbishop Theodore*, pp.88-95.

Kazhdan, Alexander (ed.), *The Oxford Dictionary of Byzantium* (3vols.), Oxford, 1991.

Lapidge, Michael, 'The career of Archbishop Theodore', in Lapidge(ed.), *Archbishop Theodore*, pp.1-29.

Martindale, J.R., *The Prosopography of The Later Roman Empire Vol.III A.D.527-641*, Cambridge, 1992.

Nicholson, Oliver(ed.), *The Oxford Dictionary of Late Antiquity* (2vols.), Oxford, 2018.

青山吉信編『世界歴史大系　イギリス史1』山川出版社、１９９１年。

足利惇氏『世界の歴史　第９巻　ペルシア帝国』講談社、１９７７年。

オストロゴルスキー、ゲオルグ（和田廣訳）『ビザンツ帝国史』恒文社、２００１年。

小高毅編『原典　古代キリスト教思想史2　ギリシア教父』教文館、２０００年。

小林功『生まれくる文明と対峙すること―7世紀地中海世界の新たな歴史像』ミネルヴァ書房、２０２０年。

サザーン、R.W.（上條敏子訳）『西欧中世の社会と教会―教会史から中世を読む』八坂書房、２００７年。

パーキー、ジョナサン（野元晋、太田絵里奈訳）『イスラームの形成―宗教的アイデンティティと権威の変遷』慶應義塾大学出版会、２０１３年。

シンメルペニッヒ、ベルンハルト（甚野尚志他訳）『ローマ教皇庁の歴史』刀水書房、２０１７年。
メイエンドルフ、ジョン（鈴木浩訳）『ビザンティン神学　歴史的傾向と教理的主題』新教出版社、２００９年。